目次

はじめに …… 1

幼稚園から大学におけるバリアフリー教育構想 …… 2

幼稚園・保育園における共用品授業の展開 …… 5

見る・触れる・遊ぶ・感じる
乳幼児期の小さな心に灯をともす「共用品」との出会い
東京都荒川区立汐入こども園 主査　池田洋子

小学校における共用品授業の展開 …… 10

共用品開発プロジェクト
道徳の授業を生かした総合的な学習の時間の展開　5年生の総合的な学習の時間
東京都小平市立小平第四小学校教諭　奥山 文子

学年別　小学校における共用品授業の展開
◎ともだちになろうよ　共遊玩具で遊ぼう!　1年生の生活科の授業
◎だれにべんりかな?　共用品を知ろう!　2年生の生活科の授業
◎町の中の工夫をさがそう　3年生の社会科の授業
◎「伝え合う」ということ　共用品を知って、学習を深めよう!　4年生の国語の授業
◎考えよう! 私たちにできること　5年生の総合的な学習の時間
◎みんなで生きる町　共用品から、ユニバーサルデザインを考えよう　6年生の国語の授業
東京都千代田区立麹町小学校主任教諭　坂本千代

中学校における共用品授業の展開 …… 30

総合的な学習の時間のボランティア活動のクロスカリキュラム
指導案（ものづくり教育の授業として指導案を作成）
総合的な学習の時間の授業として100分間の授業
東京都府中市立府中第一中学校教諭　酒井佳子

高校生・大学生の就業体験 …… 34

インターンシップの受け入れ
障害のある人達と接し、生の声から自分なりに社会のあり方を模索する
財団法人共用品推進機構

特別支援学校における共用品授業の展開 …… 38

見て、触って、理解する「共用品」
福祉コースにおける「共用品」の理解に関する授業
東京都立青峰学園 就業技術科教諭　陸川 厚子

幼稚園・保育園における共用品授業の展開

見る・触れる・遊ぶ・感じる

―― 乳幼児期の小さな心に灯をともす「共用品」との出会い ――

東京都荒川区立汐入こども園 主査　池田洋子

1 はじめに

幼稚園・保育園は、生涯にわたる人間としての基礎を培う大切な保育・教育の場です。それぞれ、様々な発達の特徴のある子どもたちが、他の乳幼児や保育者と安心して心地よい充実した生活を過ごせるようにしていくことが大切です。

さらには、乳幼児期にふさわしい環境を整え、様々な体験を通して、一人一人の子どもたちが健康な体づくりや主体的な人や物へのかかわり、また、社会性や道徳性の芽生えを培うなど、「生きる力」の基礎を育んでいく場でもあります。

幼稚園・保育園のこの大切な乳幼児期に、家庭や地域、関係機関との連携を図りながら、環境を通して個々の成長を促し、助け、育ちあい、人として豊かな生活を営んでいくことができるように、その基盤づくりが幼稚園・保育園の使命であり、役割であると考えます。

2 違いがわかり違いを認め合い、やさしい気持ちや思いやりの心を育てる

近年、幼稚園でも保育園でも色々な国籍の乳幼児が入園・入所しています。それぞれの国の文化や生活の様式の違いもあります。また、アレルギーのある乳幼児も急増しています。おやつをいただく時や給食などは、保護者、看護師、栄養士、保育者の連携のもと、個に応じて、他の友だちと違った食材が用意されることもあります。

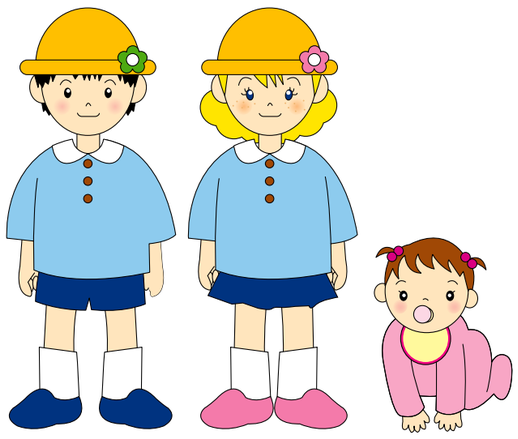
保育所では親の就労により、それぞれの生活時間が違い子どもたちの生活スタイルも様々です。さらに、特別支援の必要な乳幼児も入園・入所しています。

このように、幼稚園・保育園の集団生活の場では、様々な「違いのある子どもたちが一緒に生活」をしています。一緒に生活している施設の中で、大人も子どもも、みんながその違いを受け入れ、互いに理解し、よさを認め合い、どの子も、安心してわかってもらえていると感じながら生活できることが大切です。

3 乳幼児と共用品

「共用品」は、困っていることや今までできなかったことが、可能へと変わっていくものです。

柔らかい心をもつこの乳幼児期に、「共用品」に出会い、触れて遊んでいくうちに、自然に違いを受け止めることができます。そして、気づきや興味関心なども引き出されていきます。このことは、乳幼児期の健全な成長を促す上で、とても大事な要素であり、人としての、温かさ、やさしさ、思いやりの気持ちも無理なく育まれていきます。



指導案その1 『目がみえないってどういうこと?』 <対象　3歳児～5歳児>

本事例では、絵本「ぞうくんのさわってわかるぞう」（作　財団法人共用品推進機構）の読み聞かせを通して、目が不自由で見えないとはどういうことなのかを気づかせる。また、さわってわかる共用品に触れてみて、共用品がどのような工夫がされているか、共用品について、興味・関心をもたせることを目的とする。

（1）活動のねらい

○目が不自由ということは、どのように不便なことや困ることがあるのかを知る

○様々な共用品があることに気づいて興味をもつ

（2）主な活動

○「ぞうくんのさわってわかるぞう」の絵本を見る

○さわってわかる共用品（印のついているシャンプー・牛乳の箱・缶・携帯電話・点字絵本・玩具他）に触れて遊ぶ

（3）展　開

幼児が経験する内容	保育者の援助・指導上の留意点
◎ 絵本「ぞうくんのさわってわかるぞう」を見る	◎ 絵本を通して、さわってわかる用品があることがわかるように絵本に興味をもたせる
◎ ぞうさんが困ったことは、どんなことだったか絵本のぞうさんを思い出す	◎ お母さんの手伝いをした時や、シャンプーをする時など、ぞうくんのように困ったことはなかったかなど思い出させる
◎ さわってわかる「牛乳の切り欠き」や「ギザギザの印のあるシャンプー」の容器を実際に見て、触れてみる	◎ 「切り欠き」や「ギザギザ」などを知っていたか、買い物の時などに見たことがあるかなど、身近なところで利用されていることを気づかせる
◎ 様々な共用品があることを知り、触れて遊ぶ（玩具・点字絵本、携帯電話他）	◎ 他にも様々な共用品があることを知らせる ◎ 自由に触れて遊ぶように促し工夫されているところを気づかせる

（4）評　価

○目が不自由なことについて、困ることや不便なことなどについて関心をよせることができたか

○困っている人に工夫されている「共用品」が、身近にあることに興味、関心をもつことができたか

指導案その2 『見えなくて困ることってどんなこと?』 <対象 4歳児、5歳児>

ーゲストティーチャーを迎えてー

本事例では、目が不自由な方をゲストティーチャーに迎えて、話を聞いたり一緒に遊んだりする中で、抵抗なく障がいのある人に親しみをもち、身近で困っている人がいたら、どうすればよいかを、みんなで考える機会とする。

（1）活動のねらい

○目が不自由なゲストティーチャーと触れあい、親しみをもつ

○身近な家族（おじいちゃん・おばあちゃん他）や障がいのある人たちが、どんなことで困っているのか、体験を通して考える

（2）主な活動

○ゲストティーチャーと一緒に歌を歌ったり、点字絵本を読んでもらったり、果物などを当てる「あてっこ遊び」をしたりして、日常で不自由なこと、工夫していることなど、また、どんなことを手伝って欲しいかなどについて話をきく

○一人一人、アイマスクをあてて、目が見えないことを体験する

（3）展　開

幼児が経験する内容	保護者の援助・指導上の留意点
◎ ゲストティーチャーが果物の名前をあてたり、砂糖と塩の違いをあてる様子を見る	◎ 見えなくても当てられることに、何故?どうして?と目の不自由な人に関心をもつようにさせる
◎ アイマスクをあてて、「あてっこ遊び」をする	◎ 体験を通して、見えないこと、困ること、工夫していることを感じとれるようにする
◎ ゲストティーチャーが読む点字絵本を見て楽しむ	◎ 目が不自由な人のために点字が身近なところで使われていることに気づかせる
◎ 一緒に歌を歌ったり、ゲストティーチャーにピアノを弾いてもらう	◎ 目が不自由でも、健常な人と同じで、明るく生活していることを一緒に歌う中で感じるようにしていく
◎ 質問コーナーで白い杖のことや子どもにもできることは、どんなことがあるのかなどを質問する	◎ ゲストティーチャーと触れあい親しみをもつ中で、障がいのある人に関心をもつようにしていく

（4）評　価

○体験を通して、ゲストティーチャーに親しみをもち、目が不自由なこと、困ることなどに興味や関心をもつことができたか

○困っている人がいたらどんなことができるか、また親切にすることや、やさしく接しようとする気持ちが芽生えたか

4 まとめ（成果と課題）

人としてみんなおんなじ

一つ目の事例では、子どもたちが、目が不自由なことはどういうことなのか、絵本を通して身近な日常生活の中で困っていることや、不便なことなどについて関心を寄せることができた。そして、「共用品」がたくさんの知恵が集まり工夫されてできてきたことや、身近な人、家族、障がいのある人にとって便利であり、様々な製品があることを知った。

子どもたちは実際に共用品に触れてみて、「シャンプーの容器のギザギザ」や牛乳パックの「切り欠き」、力の弱くなった高齢者も「開けやすい缶やびん」など、五感を通して感じると共に、共用品に対する興味や関心が高まった。

子どもたちの姿

◎ 絵本を熱心によく見ていた。
- ・シャンプーの時に、「目をつぶってしまって、見えなくなったことがある」と体験を話す子がいた。
- ・牛乳の“切り欠き”は、「知ってるよ」という子も数人。シャンプーの“ギザギザ”については「えーっ!」「へぇーっ」「知らない」という子が多かった。エレベーターの点字については知っている子も多く、「駅の階段の手すりにもある」という声もあった。

◎ さわってわかるものについて
- ・実際に共用品に触れながら、「ほんとだ、これでわかるんだ･･･」と印に気づき驚きの声をあげている姿があった。（後日、買い物や出かけた折に様々な共用品を見つけて知らせあう姿もある）

二つ目の事例では、目の不自由な人をゲストティーチャーとして迎え、直接触れあい、遊びを通して無理なく自然な形で、障がいのある人に親しみと関心を寄せることができた。

子どもたちは、「アイマスク」を身につけて、目が見えなくなることを体験した。目の不自由なゲストティーチャーに絵本を読んでもらったり、ピアノを弾いてもらったりしたことが印象深かったようで、「違いはあるけれど、人としてみんな同じ」ということを、体ごと感じとることができた。

さらに、身近な人や事象に興味や関心をもち、これから自分ができることを考えたり、進んで物事にかかわろうという気持ちの高まりが見えたことは、大きな成果である。

子どもたちの姿

◎ 実際にアイマスクをつけて、あてっこ遊びに参加したときに、「先生は見えなくても全部わかるからすごいとおもった!」マスクをつけて目が見えなくなった時、「こわかった」という子、また「味をみて塩と砂糖がわかった」などの言葉が聞かれた。

◎ ゲストティーチャーの話や点字絵本を体を乗り出して集中して聞いていた。

◎ 白い杖の説明を聞いた後に「私のおじいちゃんも杖を持ってるよ」という子、ゲストティーチャーが、「道で白い杖の人を見かけたら、声をかけて欲しい」という言葉を受けて、「今度白い杖の人にあったら“こんにちは”っていう!」など、熱心に話を聞く姿が見られた。

今回の実践で、子どもたちは海綿のように色々なことを受け入れ、理解していることを子どもの声や姿を通して実感することができた。
今後も、人権尊重とバリアフリーの社会へとつながるように、焦らず繰り返し実践を重ねながら、柔らかい乳幼児期の子どもたちの心に灯りをともしていきたい。

5 保護者の感想から

＜バリアフリーの第一歩＞

- ◆ 幼児にとって、バリアフリーの第一歩となるこのような試みや情報の提供については他人への思いやりの気持ちを育てたり、色々な人がいるんだという認識をするためにも必要だと思う。
- ◆ 参加してみて、子どもの方が素直に色々なことを受け入れ、理解していると感じた。
- ◆ ゲストティーチャーから直接、目の見えないことの不自由さなどを説明されたことが良かった。子どもにも、体が不自由でも楽しく暮らしている人たちがいる、みんな同じ人間なんだと教えていきたい。
- ◆ 自分のように、見たり聞いたり走ったりできない人もいるということが、少しずつ分かってきたらしく、「今度あったら手をつないで階段をのぼる!」と張り切っている。
- ◆ 幼児期から様々な人と出会い、豊かな感性を育てることが大切だと考えていたので、このような機会を楽しみに待っていた。園児だけでなく家庭の参加で家族ぐるみの理解につながった。

＜共用品に接して＞

- ◆ 絵本の内容が、牛乳やシャンプーだったので、幼児にとって大変分かりやすく熱心に参加していたと思います。
- ◆ 家に帰ってすぐ、「スイッチ」や「牛乳パック」を確かめてました。
- ◆ 様々に工夫されているものがあることを知った。共用品の「印」を教えてもらったので、買い物をしながら子どもと探してみたい。
- ◆ 共用品は、障がいのある人だけでなく健常者にも、特に高齢者にとっても大事なことと思う。
- ◆ 買い物に行くと共用品探しに熱中した。牛乳の”切り欠き“を見つけて「これは、この間来てくれたお姉さん（ゲストティーチャー）にいいね」と話しています。